

## 計画論の先端課題としてみた参加型減災コミュニティ計画論とその支援技法

## Community-based Disaster Reduction Planning - An Edge-cutting Theme for Planning Sciences

○岡田憲夫

○Norio OKADA

Community-based disaster reduction planning which is becoming a must in citizen-involved participatory approach requires us to explore an edge-cutting theme for planning sciences. This paper attempts to identify essential issues of the theme. As a first step it discusses how to formulate knowledge and technology and to achieve collaborative action development. With reference to classical knowledge such as Aristotelian “Topica” as well as knowledge related to holistic platform or “ba” for multi-agent communications, derived from new theories of biological systems and systems of complexity, the paper discusses how to scientifically explore the methods and tools of participatory workshops for disaster reduction.

## 1. はじめに

参加型減災コミュニティマネジメントを計画論として捉えようとする、計画論全般に関わるきわめて先端的かつ根源的な課題に向きあわねばならない。この種の課題の論考は、多角的・多層的なアプローチが必要であるが、ここではまずその第一段階として、計画論的課題を旧と新に対照させて以下のように定義することから始める。

## 2. 計画論の新しい挑戦課題

[I] これまでの計画論の適用範囲：問題認識の共有とその解決のための合目的な方策の提示を思考実験の範囲で系統的に行うプロセスとその結果を明示的に表現したもの。

[II] 先端的かつ根源的な新しい挑戦課題：懸念・心配等の漠然とした関心事(concerns)を共有することから始めて、相互に信頼できる関係を醸成し、[I]のこれまでの計画論の適用範囲を包摂した上で、〈思考実験の範囲を飛び越えて〉、合目的な方策として提示された行動の実効性を実際の現場で適応的(adaptive)に検証・担保するためのプロセスとその結果を明示的に表現したもの。これは PDCA(または CAPD)サイクルのプロセスマネジメントとみなすことができることが示されている。なお[I]の計画論では、合目的な方策として提示された行動の実効性を実践の現場で検証・担保することには、計画は直接的に関与せず、その執行の責任は担わない。この意味で、[I]の計画論は上流、実践論は下流に置く(上下流一方向)形で全体的にプロセスマネジメントすることを想定している。また〈思考実験の範囲を飛

び越えて〉、実践の現場にまで計画の知的活動を拡大することは、いわばマルクスの貨幣論でいう「命がけの跳躍」とみなすこともできる。また中村<sup>1)</sup>の「臨床の知」や田辺<sup>2)</sup>の「実践知」に踏み入れることでもある。

## 3. 協同的行動開発

実は思考実験の範囲を超えて、適応的に実践可能な行動を計画・マネジメントしていくためには、協同的行動開発(Collaborative Action Development)という知的活動を想定し、システム科学的に解明し、その実践知を定型化することが求められる。ここでは協同的行動開発が人間にとって根源的な要件とみなし、アリストテレスの「トピカの実践」という古典的知見に求める<sup>3)</sup>。すなわち、これは、「発見」、「配列」、「設問」という3段階で行われるという。ケケロは「設問」を、精緻化し、「措辞」、「記憶」、「陳述」に分けている。

重要なことは、これらがいずれも何らかの「場所」と関係付けられることで実効性が高まるということである。これより、参加型減災コミュニティ計画の支援技法としてのワークショップには、技法(ツールとその利用の技術)としての特性と、技法を越えた「生命知としての場」<sup>4)</sup>の醸成という特性を兼ねた機能が目論まれていることが示される。

\*参考文献

1) 中村雄二郎:臨床の知とは何か, 岩波新書, 1992

2) 田辺繁治:生き方の人類学, 講談社, 2000

3) 中村雄二郎:場所(トポス), 弘文堂, 1989

4) 清水博:生命知としての場の論理, 1996